



アート映画が描き出す Bangladesh のアイデンティティ

南出 和余

桃山学院大学准教授

Bangladesh アート映画

二〇一五年の Bangladesh シュ・ナショナル・フィルム・アワードに選ばれた「オニル・バグチの一日」は、Bangladesh を代表する現代小説家フマユン・アフメッド（一九四八―二〇二二）の同名小説を、こちらも現在の Bangladesh シュ映画を牽引するモルシエドゥル・イスラム監督（一九五七―）が映画化した作品である。フマユンは小説家としても、また映画監督としても、階層を超え広く Bangladesh シュの人のびとに愛されてきた。そのストーリーは、Bangal 民族の豊かな情緒と温かくユーモアに満ちた人柄が、世の中の雑多な矛盾を優しく包み込むものが多く、過度なイデオロギーをはずかしく見ながら弱者に光を当てる。モルシエドゥル監督はそんなフマユン小説を、



オニルのクライマックスシーンの撮影風景

ある日、ダッカで暮らすオニルのもとに、父がパキスタン兵に殺害されたという知らせが届く。一人残された姉オトシを思い、オニルは帰郷を決意する。映画が描く一日は一九七一年、つまりパキスタンからの独立戦争下の一日である。パキスタン兵から名前を聞かれて「オニル・バグチです」と名乗ることさえ危険がともなう情勢であった。その名前がヒンドゥー教徒であることを明示するからだ。一九四七年の印パ分離独立の際、Bangal 東部の人びとは同じ Bangal 民族が暮らすインド西 Bengal 州とは袂を分かち、イスラームを旗印にパキスタンの東

「オニル・バグチの一日」

原題：অনিল বাগচীর একদিন

2015年 / Bangladesh / Bengali 語 / 120分

監督：モルシエドゥル・イスラム

出演：アレフ・サイド、ジュティカ・ジュティ、ガジ・ラカエットほか

日本での公開なし



映画最後のシーンの撮影風景。霧の降る夜更けをシーンに生かす

翼としての道を歩んだが、そのなかには英領時代以前から暮らすヒンドゥー教徒も多くいた。しかし、一九七一年の独立戦争下、パキスタン軍が Bangal・ムスリムより先に排除しようとしたのが Bangal・ヒンドゥー教徒であった。情勢が悪くなるにつれ、多くのヒンドゥー教徒が土地を捨てインド側への避難を余儀なくされた。独立戦争を語る小説や映画のなかには、そうしたヒンドゥー教徒との別れを描いた作品が少なくない。

興味深いのは、オニルに対する周りのムスリムの人びとの描かれ方である。下宿先の大家も勤め先の上司も、オニルをかくまうことで自分に降りかかるリスクを感じながらも、なんとかオニルを守ろうとする。それは故郷へ向かうバスで乗り合わせたアユブも同様だ。がさつなほどに馴れ馴れしいアユブは、オニルの名前を聞いた途端に危険を察知し、見ず知らずの彼に自分の

義甥の名前（ムスリム名）を名乗るよう勧め、パキスタン兵からオニルを救おうと努める。このオニルに対するアユブの心性こそが、現代の Bangladesh シュのアイデンティティを示している。

映画は自然に忠実であれ

本映画制作中の二〇一四年、わたしは Bangladesh シュに滞在しており、幸いにも撮影に同行する機会を得た。本映画の製作費は約一五万米ドルと低コストだったが、その背景にはローカルな素材が最大限に活用されていることがある。四三年前の状況を再現するため、地方に行けば今も走っているおんぼろバスを探し出してきた。また、パキスタン兵がもつ銃のレプリカ製作費を節約するため、本物の銃を所持できる本物の警察に演じてもらった。そして何より自然は紛れもない本物である。雨が降れば雨のシーンを撮り、日が沈むのを待つ。映画は Bangladesh シュの農村風景の美しさ、人びとが誇りとし心の拠り所とする「黄金の Bangal（シヨナル・Bangal）」に忠実である。



映画の舞台となったおんぼろバス。今も地方の町を走っている

映画のなかでオニルの父親が発するメッセージと、映画そのものが映し出す自然の美しさが重なり合って、Bangladesh シュの人のびとに共感と感動をもたらす。「オニル・バグチの一日」は、まさに Bangladesh シュの人のびとのアイデンティティを知るうえで大切な映画である。